
キツネツキ！

石神穂波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネツキ！

【Nコード】

N7840D

【作者名】

石神穂波

【あらすじ】

”狐”の名を持つ二人の女の子が繰り広げる、エッチな和風伝奇ファンタジーです。どんな事件が起きるのか？それは読んでのお楽しみ

第一話 智狐と狐子（前書き）

こんにちは、石神穂波と申します。

小説を書くのは初めてなので読み難い点など多いと思いますが、暖かく見守って下さいね！

この作品は春エロス2008参加作品です

第一話 智狐と狐子

その時、秋葉^{あきはともし}智狐は欲求不満に陥っていた。

「ん〜！エツチしたいなあ！」

サンドイッチを握り締めたまますつくと立ち上がって青い空に叫ぶ智狐。

サラッとした長い髪が靡き、形の良い胸がぶるん、と振るえ、廻りの男から小さな歓声が上がった。

ガタン！

智狐の目の前でお弁当を掻き込んでいた

悪友の清水^{しみずき}狐子がずっこける。

「あんだねえ、デッカイ声でなんて事叫んでんのよ！」

春の日差しが眩しいキャンパス。

二人は少し遅めの昼食タイムを楽しんでいる。

「だってえ、最近イイ男が居ないんだもん。」

ねえキコリン、抜かすの十発位軽々とこなすイイ男紹介してよ」

ブバツ！ゲホゲホゲホ！きゃああああ！

隣のテーブルの男がコーヒーを噴出して咽せ始め、

その前に居た彼女らしい娘がコーヒーマみれになって悲鳴を上げた。

狐子がバン！と音を立ててテーブルを叩きつつ智狐を睨みつけて怒鳴る。

「あ・の・ね！！いい加減にしときなさいよこの淫乱！」

一体何股掛けるつもりなのよ！あと、キコリンって言うな！！」

「またやってるよ、あの二人」

「どうせ秋葉が暴走してるのを清水が抑えてるんだろ。いつもの事だ」

「それにしても秋葉って、ウチの大学の色男何人喰ったんだ？」

「噂じゃ三十人とも、百人とも言われてるが」

「マジ？俺も喰ってもらおうかな？」

「バーカ、お前じゃルックス審査で撥ねられるって」

「やあねー、秋葉さんって、イツドコヤリマンって言われてるのよね」

「何それ？」

「イツでもドコでもエッチしちゃう、って事よ」

廻りのテーブルから聞こえてくる、
潜めようともしない影口にヒクつきながらジロツと廻りを睨みつける狐子。

その迫力に押されて、周囲の人間が一瞬でシーンと静まり返ってしまふ。

「やーね、キコリン。そんな怖い顔していると彼氏なんて出・来・ない・ぞ」

「おんどれはあああああ！」

狐子は、完璧に人事の様にウインクしながら微笑む智狐の頭をぱしーんと叩いた。

「あー、疲れ果てたよあたしや」

講義が始まり、机に突っ伏しつつ唸る狐子に、同じ高校から進学して来た有香ゆかが同情する。

「大変ねえ、智狐ちゃんと付き合うのも。

ねえ、何で狐子は智狐ちゃんと仲が良いの？」

「んー、何でだろ……？」

狐子と智狐が出会ったのは二年前、大学の入学式。
背が高く、パツと見は美形の男性にも見える狐子に智狐が突然声を

掛けてきた。

「あの、入学式終わったら私とエッチしませんか？」

大きな瞳をキラキラと輝かせながらウキウキと声を掛けてきた智狐の、

外見の凄まじい可愛らしさとその発言のギャップに平衡感覚を失った狐子は

思わず講堂の床にへたり込んでしまった。

「やだ！医務室行きましょ！」

智狐は華奢な体からは想像も出来ない怪力で狐子を引き摺り、医務室のベッドに引つ張り込んで余りの事にパニックっている狐子のスキを突き

あつと言つ間に服を脱がせた。だが、Bカップのブラにたどり着いた瞬間に

「……チツ」

と黒い表情で舌打ちをした智狐の頭を狐子が「なんか文句有んの！？」

と叫びつつスパーン！と引つ叩いてからの腐れ縁である。

お互いが地方の稲荷神社を実家としていて

名前に「狐」が入っている事もあり、

また恋愛以外の事では淒く気が合つてしまい、

智狐の奇行に何度もうんざりしながらも付き合い続けているのだ。

「それにしても、確かに智狐ちゃんは可愛いわよね。

男のコにモテるのも良く解るわ」

狐子は、のほほんとした声を掛けてくる有香の顔を情けない思いで見詰ながら返す。

「そつなのよね。私が男だったら、最初に声掛けられた瞬間に襲っちゃったわよ」

そう、確かに智狐の可愛らしさと色っぽさは並ではない。

顔はアイドル並み、スタイルはモデル並み、性格は……

「エロ親父並みかあ」

ボソツと呟く狐子を痛ましそうに見つつ、

「でも、そう言う狐子だって相変わらずモテモテじゃない。

相変わらず、主に下級生の女の子にだけど」

170センチの長身ですらったとした細身のスタイル、

髪をショートにしている狐子は年下の女の子の憧れの的だ。

子供の頃から男の子と元気に駆けまわっていたので、

今更女の子らしい格好して男とお洒落なデートとかするなんて

チャンチャラおかしいと思ってしまう。

「はああー……」

なんだか色々と大変ねえ、とか言いながら講義に耳を傾け始めた有香の横顔を見ながら、狐子は大きくため息をついた。

第二話 欲張り娘の午後（前書き）

第二話投稿しました

感想やご意見、待ってまーす。

第二話 欲張り娘の午後

「ねーねー狐子ちゃん、今夜の合コンなんだけどお」

講義が終わり、狐子が学食でおやつ代わりのキツネうどんを啜っている

智狐がやって来て、ウキウキした表情で話し掛けてきた。

「んー、私はパスって真美子に言っておいたけど？」

「ってあんた、何たぬきそば持って来てんのよ？」

「だってえ、学食のキツネうどん飽きてきちゃったんだもん」

狐子が呆れたように智狐を見詰める。

「あんたねえ、いくらなんでもたぬきは無いでしょ、たぬきは」

「そんな事はどーでも良いんだけどお、

今夜の合コンの相手の男の子の中に、アレがいるらしいのよね」

「ずずとおそばを啜りながら智狐が嬉しそうに言う。

「アレって、もしかしてアレ？」

「そーなのよ！久しぶりでしょー！

もー、絶対落とすんだもん！アレならエッチも強いし、

散々やりまくった後に更に美味しく頂けるじゃない？」

「ぶばっ！！げへごぼげは！きいやあああっ！！」

狐子たちの隣の席のカップルの男がカレーライスを爽快に嘔出して、目の前に居た彼女らしき娘がカレーまみれになって悲鳴を上げた。

狐子はカップルを気の毒そうに見た後、

「何お気楽な事言ってるのよ。アレのチカラがどれ程のものか

解らないんでしょ？あんたはまだまだ成熟し切ってないんだから、逆に取り込まれる可能性だって十分有るのよ？」

この前だって、危なく逆喰^{さかは}みされそうになった癖に」

と非難がましく智狐に注意する。

「えへへ、でも止められない止まらないのよね。」

で、狐子ちゃんにお願いっ！

今夜の合コン、パスなんて言わないで一緒に来てえ。

一番は狐子ちゃんに譲るからあ」

「あんたなあ……」

狐子は溜息を付きながら額を押さえるが、一番を譲る、という所で一瞬だけ表情が動いたのを智狐は見流さない。

「ねー、一番は狐子ちゃんに譲るからあ。一番は」

一番、を連呼する智狐と、一番、に反応してピクピクする狐子。

自分達の世界に入り込んでいる二人を周囲が冷やかに見詰めている……。

「あら、おキツネ様が二人揃って頭抱えてどうしたの？」

その時、涼やかな声が二人に掛かり、

「あ！狼子先輩……！」

狐子がかあつと頬を赤くしながらがたん！と立ち上がり、
「……ちっ」と黒い表情で吐き捨てるように智狐が呟いた。

くあんじりょうし
- 久遠神狼子 -

狐子と智狐のゼミの先輩で有り、学内最高の美人として名高い才女。決して自ら目立とうとする事は無く、控え目で清楚な性格で教授から下級生まで幅広い人気を誇っている。

智狐の同郷の先輩でも有り、実家はオオカミ様を祀る神社で、狼子は智狐を可愛がっている様に見えるのだが、なぜか智狐は狼子を煙たがって避けている。

狼子が焼肉定食の載ったトレイをすいっとテーブルに置きつつ智狐の隣に腰掛ける。

「……狼子先輩、なんで私の隣に来られるんですかあ？」

天使の様な微笑で悪魔の様に毒を吐く智狐に、狐子の心臓がドキーン！と跳ね上がる。

「ちよつと智狐！なによその言い草は！？」

まるで自分が獵犬に追い詰められたような気分になりながら

アタフタとキョドリ、狐子は智狐を叱り付けた。

「だってえ、狼子先輩に隣に座られるなんてえ、恐れ入谷の鬼子母神だもん！」

両手を顎の下で握り締め、プルプルと頭を振りながら可愛狐かわいこぶる智狐。

「良いのよ、智狐ちゃんは照れてるだけだものね」

狼子が音も立てずにお茶を啜りながらにつこりと微笑む。

狐子がふと見ると、既に焼肉定食は完食されていた。

”ど、どんだけ……”

二分と掛からず、運動部の連中も満足するボリュームの定食を平らげた

ほっそりとした純和風美人の雅な微笑を冷や汗混じりに見詰める狐子。

「どうしたの狐子ちゃん？私の顔になにか付いてるかしら？」

薄いピンク色の唇を形良く開きながらにつこりと笑う狼子の口元から、

鋭利な犬歯がのぞいてキラリと光った。

「あわわわ……な、なんでもありません！」

狐子はその静かな迫力にさーつと青ざめながら、

「わ、私達ちよつと用事が有るので失礼しますっ！！」

と叫んでためきそばをずるずると啜っている智狐を引き摺り学食から走り出る。

「あらあら、忙しいわねえ、キツネさん達は」

不思議そうに二人を見送った狼子は、食券販売機で唐揚げ定食の食券を買いながら呟いた。

「あのー、おそばの井どうしましょーか？」

ぜいぜいと肩で息をしながらベンチに突っ伏す狐子に、
ずずーっとためきうどんの汁を飲み干した智狐が声を掛ける。

「知るかつ！！後で返しに行けばいいでしょっ！！」

「へーい」

フンフンと鼻歌交じりに辺りを見回していた智狐が

「あ、武藤くん。おーい」

と歩いていた男子学生に声を掛けた。

「あ！あ、秋葉……」

声を掛けられた武藤はビクッと驚き、おどおどしながらこちらにやって来る。

「うふふふ、ねえ武藤くん？なんで昨夜帰っちゃったの？」

にまあ、と微笑む智狐の目が赤く光り始める。

「あ、ご、ゴメン。昨夜はちょっと……用事、が……」

智狐がすいっと武藤に近付き、背中に手を廻して抱き付きながら首筋に唇を当てた。

「あ、秋葉……」

武藤が目を瞑り、ピクピクと痙攣を始める。

「うふふふ……ちょっとだけ、いただきまあす……」

武藤の首筋をちゅううと吸いながら、智狐の右手がはちきれんばかりに盛り上がった

武藤のGパンの中心をさわさわと小刻みに撫で始める。

「う……うああ……ああああ！！」

次の瞬間、武藤の長身がビクビクン！と大きく痙攣し、
ガクツと頂垂れながらヘナヘナと芝生の上に崩れ落ちた。

「あらあ、早い事早い事。ま、でもビタミン剤程度にはなったかな

」

Gパンを通して滲み出した、武藤の精の付いた右手をぺろっと舐めながら智狐が色っぽく呟く。

「ようやるわ……」

狐子は呆れ声で呟きながら、智狐の行為を見て火照ってしまった^か肉^{らた}体^たを持て余していた。

第三話 危険な合コン

「かんぱーい！」

学校近くに在る、付近の学生やサラリーマン御用達の安くて美味しい居酒屋。

集まったのはオトコ五人にオンナ七人。

不参加の筈だった狐子が智狐によって半ば無理矢理参加させられたので、

男女比が狂ってしまった。

「もー、だからヤダったのにい」

巨峰サワーをぐいっと飲み干し、ケラケラと陽気に笑う智狐を睨みつつ呟く狐子。

狐子の横にはニヤけ面の軽そうな男が座り込んで、狐子を口説き始めている。

智狐は既に二人の男を侍らせて上機嫌だ。

そして、余った二人の地味目な娘の憎しみの籠った視線が狐子と智狐に突き刺さる。

それにしても、智狐の言ってたアレは一体どの男だろうか？

いつもならアレがどんなに隠そうともハッキリと解る筈なのに……

大きく溜息を付いて、しつこく話し掛けて来るニヤケ面を

適当にあしらおうかと口を開きかけた時、

「やあ、遅れてゴメンね！」

と爽やかな声で挨拶をしながら、本日の男の中でぶっちぎりのイケメンが現れた。

「レイ遅いぞ！ペナルティだペナルティ！」

男側の幹事がイケメンに向かって口を尖らせながら文句を言う。

「悪い悪い、ちょっと教授に呼ばれちゃってさ」

人懐っこい笑顔を浮かべながら靴を脱ぎ、座敷へと上がりつつ自己紹介をするレイ。

その瞬間、狐子と智狐の背筋にピリピリとした電流の様な感覚が走った。

”来たよ、狐子ちゃん！彼ね”

智狐がチラッと狐子を見ながら嬉しそうに精神に直接話しかけて来る。

”って、ちょっとヤバいんじゃないの！？かなり強そうよ”

しかし、狐子は今まで遭ったどのアレよりも強力なピリピリ感を感じて不安になっていた。

”う。確かに……でも、きつとメチャクチャ気持ち良くて美味しいわよ。二人なら大丈夫よ、きつと”

”あんたねえ、それでこの前やられ掛かったの忘れたの！？”

全然懲りてない智狐にうんざりしながら狐子はもう一度レイを見ると、いつの間にかレイがこちらを見ていてニヤリ、と微笑んだ。

ゾクつとした強烈な寒気を感じて、狐子の本能が”ヤバイ！”と警鐘を鳴らし出す。

智狐に彼は止めよう、と念を送ろうとした瞬間、

「キミ、可愛いね。智狐ちゃんっていうんだ」

レイが智狐を挟んでいた男の一人を退かし、馴れ馴れしく智狐の肩を抱きながら座った。

「ありがとうございまゝす でも、いきなりコレは無いですよ」
につこりと微笑みながら智狐が肩に廻されたレイの手を摘みあげてどかす。

「ありゃ、イヤだった？こりゃ失礼！」

おどける様に笑いながらレイが智狐から手を離れた、が

狐子の目には肩から離れた筈の手がそのまま残っている様にしか見えない。

いや、退かした手とは別の、普通の人間には見えない手が智狐の肩に残ったままだった。

「智狐、ちよつとトイレ付き合つてよ」

レイが残した靈手に智狐は気付いていない。

このままじゃ、あの手が智狐に何をしてくるか解らない！

狐子はちよつと無理が有るな、と思いながらも智狐と連れトイレに誘い、

「うん、良いよ」

智狐もそう言いながら立ち上がり、狐子と一緒にトイレへと向かった。

智狐の隣に並んで歩きながら、レイが残した筈の手を確認すると既に離れているのか全く見えないし気配も無くなっている。

「ねえ、あんた気付いた？あんたの肩に彼の靈手が残ってたの」

トイレの洗面台に並び、小声で智狐に聞く狐子。

「えっ！そうなんだ。道理で違和感有る筈ね」

あちゃあ、といった顔で驚く智狐に

「ねえ、彼はヤバいわ。今まで見てきた中で最高クラスの”鬼”よ」と少し震えた声で言う狐子。

”鬼”……

全ての人間が内包して生まれてくるが、それに気付き、自覚し、そしてその力を行使出来る様になる人間は少ない。

だが、もしその力を行使出来る様になったとすると……

「遅いじゃない、二人とも」

「きゃっ！」「ひゃあっ！」

突然背中に掛けられた言葉に驚いて振り返る二人。

そこには、さっきの爽やかな微笑ではない邪悪な笑みを浮べたレイがすつと立っていた。

「ここは女子トイレなんですけどお？」

智狐が後退りながら震えた声で注意する。

「うん、解ってる。大丈夫、外の人間は皆寝てるから」

「なんですって!？」

狐子がハッとした様に時計を見る。

腕に巻いたGショックのデジタル表示が全く進まなくなっている。

「時間を止めたの…？」

智狐と狐子の顔がさーっと蒼ざめる。

蒼くなつた二人の顔を愉快そうに見ながらレイの笑いがいつそう邪悪に深くなり、

「旨そうな狐を二匹、まだ未熟なうちに喰っちまえるとはな」

ぐん、と奇妙に歪んだかと思つと皮膚がぐんぐん赤くなっていく。

「ごあああああつ！」

全身を真っ赤に染め、床を震わすような雄叫びを上げるレイの姿は既に人間のモノでは無くなっていた。

第四話 狐子・人生終了？（前書き）

穂波でっす！

お待たせしましたぁ。

ちよつと忙しくてうにゅうにゅしてました（・ゝゝゝ
これから頑張って書きますのでヨロでっす！

第四話 狐子・人生終了？

「ちょ！ヤバいわよ！」

狐子が焦りながら叫んで智狐を振り返ると、既に智狐の鼻が尖り始めている。

「狐子ちゃんも早くコン！」

服から抜け出すように跳躍し、鬼の肩に喰らい付いた智狐に向かって「わ、解ったわよ！ちよつと耐えてて！」

と答えて変化し始める狐子だったが、変化しなれている智狐と違い狐子が変化しきるのには多少時間が掛かってしまう。

「きゃん！」

鬼の腕に掴まれ、無理矢理引き剥がされた智狐が悲鳴を上げるのを見て焦る狐子。

「狐子ちゃん、早くうつー！」

智狐が鬼の腕から逃れ、飛び退こうとした時に

二本に分かれた尾の片方を掴まれ、振り回されて壁に叩き付けられてしまった。

「きゃうん！」

ビクン！と大きく跳ねて悶える智狐。

「まずはこっちから喰ろうてやる……」

床の上で悶える智狐に手を伸ばしかけた鬼が、ピタリとその手を止めた。

「今度は私が相手だコン！」

鬼の背中に、智狐の変化体よりも二廻りは大きく尾も四つに分かれている

狐子の変化体が跳躍しながら襲い掛かる。

鬼が振り返るよりも早く、狐子は太い首筋にガツと喰らい付いた。

「ぐえあああ！」

鬼が苦痛に吼え、狐子を引き剥がそうと豪腕を背中に廻すが

狐子は器用にその腕を避けて牙を更に食い込ませる。

「コーン！」

その時、なんとか回復した智狐が鬼の股間にはっしと喰らい付いた。
「ぐおおおおお！？」

鬼の口から、苦痛の様な快感の様な、なんとも言えない叫びが漏れる。

「はむはむはむん……コーン……」

喰らい付いた智狐の顔が、とても美味しそうな蕩け顔に変わって行くのを見て

「ちよつと、最初は私に譲るって言ってた癖にコン！」
と思わず首筋から牙を抜いて文句を言ってしまう狐子。

「ぐおおお……おお、お？おおう！」

その瞬間、鬼の姿がブウン、とぶれて元の人間の姿に戻り始めた。
「あー！ー！もう出させちゃったコン！」

しゅるるる、と縮小するように人間の姿に戻った鬼がビクンビクン！と振るえ、

ヘナヘナと床に崩れ落ちる。

「えへへ、ゴメンね狐子ちゃん。だって、ああするしかなかったんだコン」

「むー！ー！コン！」

シウルシウルと人間の姿に戻る二人。

「ちよつとお！まだ口の中に入ってるんじゃないの？」
がっしと智狐の肩を掴み、ずずいと迫る狐子。

「ちょ！何する積りなの！」

必死で逃れようとする智狐をぐつと押さえてぶちゅつと唇を押し付け、

無理矢理に智狐の口の中に舌を出しこむ。

「むーむー、むー！！」

壁に押し付けられ、強引に唇を奪われた智狐が手足をぶんぶかと振り回しながら抵抗するが力ではとても適わず、少ししたらくたんとおとなしくなってしまうた。

ずちゅるるるるる……

ビクビクと震える智狐にしばらく吸い付いていた狐子だったが、
「もう！殆ど残って無いじゃない！」
と文句を言いながらバツと唇を離す。

「ひどいよ狐子ちゃん」
半泣きでへにやへにやと崩れ落ちながら、智狐が弱々しく抗議の声を上げた。

ブウン……

一瞬耳障りな音がして、静かだった世界に音が戻ってくる。

「あら、時間が動き始めたわね」
ふう、と溜息を付きながら智狐とレイを見下ろす狐子。
そして、素っ裸の智狐に気付き、自分達が変化したまま服を着忘れていた事をようやく思い出した。

「ヤー！ヤバッ！！」

また見計らったようなタイミングでトイレの入り口のドアノブが力チャ、と音を立てて回り、

「ひよええええ！」
狐子が叫びながら床に散乱した自分の服をかき集めるもすでに間に合うワケが無く、無常にもドアは大きく開かれてしまった。

トイレの中には素っ裸の智狐、狐子、おまけに下半身丸出しのレイ！

” さよなら、私のキャンパスライフ…… さよなら、愛しき普通の日々よ……”

狐子が涙と鼻水を溢れさせながら頭を抱え蹲るのを冷やかに見詰め、
「よーこそ、こちら側へ」

等と嬉しそうに呟く智狐の目付きはこれまで見た事が無い程邪悪だった。

最終話 キツネツキ！

「あああああああ！」

頭を抱え、泣き叫んでる狐子の目の前で、ドアが無常に開く。

” さよなら……私の青春……さよなら、私の恋心…… ”

混乱した狐子が、混乱した思考で意味不明な脳内世界を展開していると、

「あらあ？おキツネ様が揃って変態行為してたのね？

もっ、お茶目さんなんだからあ」

と聞き覚えの有る声が響く。

「え？」

涙と鼻水をダーっと流した狐子が恐る恐る頭を上げると、そこには狼子がニコニコしながら立っていた。

「げ」

智狐が心底嫌そうに顔を歪めながら呻くのを聞いた狼子が

「なあに？こっちの狐ちゃんはどこで大声出してほしいのかしら？」と色っぽい流し目を送りながらふふん、と鼻で笑った。

「狼子先輩……？」

狐子が入ってきたのが狼子だったことに心から安堵しながら、しかしキャンパスで見る狼子とは明らかに異なるその雰囲気に一瞬ぞくつとする。

「ねー智狐ちゃあん？あなた私を舐めてるんでしょ？」

ひくりと引き攣っている智狐のあごをひよいと摘み、狼子が色っぽ

く囁く。

「あれ？あはは、狼子先輩、もしかして酔っ払っていらっしやいませんか？」

あつという間に真つ青になった智狐が恐る恐る、といった感じで尋ねると、

「そうよ？飲んでちゃいけないのかしら？」

とにつこりと微笑みながら、狼子が智子のほっぺをみょーんと左右に引っ張り始めた。

「いひやいいひやい！しえんはいいひやいつしゅ！」

半泣きになった智子が叫びながら、狐子に助けを求める様に涙を溢れさせた瞳を向けるが、

狐子も青白いオーラすら醸し出している狼子の様子にビビッてしまい声も出せない。

「ふふふ〜ん、悪い子にはお仕置きしなきゃね〜」

さあ、いらっしやい！ガンガン飲むわよ〜？」

狼子はささつと素早く散乱していた服を智狐に着せ、耳を引っ張って連行していく。

「ほら、狐子ちゃんもいらっしやあい？私のお酒が飲めないなんて言わないわよねえ？」

ゴゴゴゴゴゴ、と言う擬音すら聞こえて来そうな様子で振り向く狼子に、

「ひゃ、ひゃい！頂きますっ！」

と答えながら大急ぎで服を着て、智狐を引き摺る狼子の後に続く。

「よし、お姉さん今日は奢っちゃう！」

調子良く氣勢を上げながら歩く狼子に付いて行きながら、狐子が何か忘れていた様な気がしてふと考え込んだ瞬間、

普段はキチンとキレイに整頓されている狐子の部屋に阿鼻叫喚の地獄絵図が出現してしまった。

一週間後

「おっはよー狐子ちゃん！」

すっかり元気を取り戻した智狐が朝っぱらから高テンションで智狐に声を掛けて来る。

「……うはよー」

対照的に、狐子は思いつ切りローテンションで挨拶を返す。

三歩歩けば全てを忘れる能天気な智狐と違い、

狐子は体力的にもだが、何よりも精神的なダメージが深く完全回復には至っていない。

「何よう、まだ引き摺ってるの？そういう時は合コンよ合コン！」

今夜、カッコ良い男の子がいっぱい来るコンパが有るんだけど、

狐子ちゃんも来るよね？」

顔に傍線を数本引いたまま智狐の声を聞き流していた狐子が、

「冗談じゃないわよっ！先週の惨劇を忘れたの？もうしばらく合コンなんてごめんだわ！」

と、凄まじい勢いで智狐に喰って掛かった。

「えゝ？だつてあれは、クソ狼が乱入して来たからあんな悲惨な事になったんで、

別に私も合コンも悪くなんてないじゃない？」

小さな拳をあごの下に付け、ふるふると顔を振りながら可愛狐かわいこぶる智狐を見て、

ビクッと青筋を立てながら狐子が叫ぶ。

「アホかあっ！とにかく行かないんだから！」

ぴいっとそっぽを向いてスタスタと歩き出す狐子だったが、智狐は

しつこく追い縋る。

「ねーねー、今夜はクソ狼とバッティングする様な場所じゃないから大丈夫よ！ね？」

「あらあ、クソ狼って誰のことかしら？」

その時、二人の後ろから穏やかな、しかし地獄の底から響いて来る様な声が掛かった。

「あ！狼子先輩！」

狐子がぱあつと微笑みながら振り返ると、乾いた笑いを張り付かせたままの智狐の真後ろに

でっかい青筋を立てながらにこやかに微笑んでいる狼子の姿が有る。

「智狐ちゃん？ちよつとこっちいらっしやいな？」

ワシつと肩を掴まれた智狐が、

「助けて狐子ちゃん……」

と涙をダァつと流して微笑みながら必死で助けを求めてくる。

だが、狐子はふつと冷笑しながら

「狼子先輩、さっき智狐が先輩の悪口を一ダース位言っていましたよ。

たっぷり、お仕置きして上げて下さいね」

と言い放つ。

「ふうふううん？智狐ちゃんは同郷の先輩にそういう態度なんだあ？

今日はじっくりとお説教しなきゃね？」

コレは智狐ちゃんの為なんだから、感謝してね」

ギリギリと肩に食い込む狼子の手の痛みに、智狐は声すら上げられない様だ。

「じゃあ、狼子先輩お願いしますねー！

智狐ちゃん、しっかりとご指導してもらって来てね！」

ふつと侮蔑の笑いを投げ捨て、歩き出す狐子の背中に、

「裏切りモノおおお！！」

という智狐の魂の叫びがこえました。

「やれやれ、まだまだこの先波乱含みなキャンパスライフになりそう……」

溜息交じりに呟く狐子だったが、その口調は以外に楽しそうな色も含んでいる。

「さ、こんどはもっとまともな男見つけなきゃね！」

にっこりと微笑む狐子の唇から零れた牙が、陽光を浴びてキラリと光った。

二人のキツネの廻りには、まだまだ騒動が続きそうだ。

キツネツキ！

終

最終話 キツネツキ！（後書き）

こんにちは、石神です。

読んで下さった皆様、ありがとうございました！

小説を書くのがこんなに難しいなんて思いませんでした……。

正直、身の程知らずに浮かれていた自分を反省してます。

でも、懲りたりなんかせずに、頑張って勉強して今度はもっとまともな作品を皆様にお届けしたいと思います！

その時には、また読んで頂ければとっても嬉しいです！

本当にありがとうございます。

最後に、この企画を頑張って企画、運営して下さった春エロ様と、完結させる気力を無くしていた私を叱り飛ばして、気持ちを奮い立たせてくれた大好きな私のおじ様、羽沢将吾センセイに心からの感謝を込めて！ありがとうございますっ！！

それでは、また逢う日までご機嫌よう！！

石神 穂波

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7840d/>

キツネツキ！

2010年10月14日00時22分発行